たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.30　　平成6年3月31日

仮面状土製品
多摩ニュータウンNo.72遺跡
八王子市堀之内　現存する長さ　約12cm

縄文時代の顔

私の名前は「仮面状土製品」と申します。この度、縁あってNo.72遺跡の住まいから現われました。年齢は皆さんがおおよそ四千五百歳と言ってくれています。永らく泥で顔をパックしていたお陰で皆様に素顔でもお見せできますが、元はベンガラや黒漆で綺麗に化粧をしていました。髪は耳を隠したおかっぱ頭です。眉毛はやや太めで可愛いらしく、また目は少々つっていますが、そこが私のチャームポイントです。鼻は美人の誉れ高いクレオパトラには負けますが、鼻筋が通り高いのが自慢で、鼻の穴も格好よく平成人的です。口はちょっと開けていて、色っぽく見えませんか。

私の素顔の一部を皆様にお見せしますが、私の仲間は縄文時代の後期や晩期に多く見られます。ところが縄文時代中期中葉では私一人だけで、今のところ私が日本で最も古い顔（仮面状土製品）になるそうです。当時の縄文人は私を使って何をしようとしていたのでしょうか。一説にはまじない師さん達が、霊（れい）を呼ぶまつりなどの際に使用していたと言われています。

まだ私の顔をすべてお見せできませんが、きっと皆様が調査で発見してくれるものと信じております。

（竹尾　進）

遺跡だより㊲

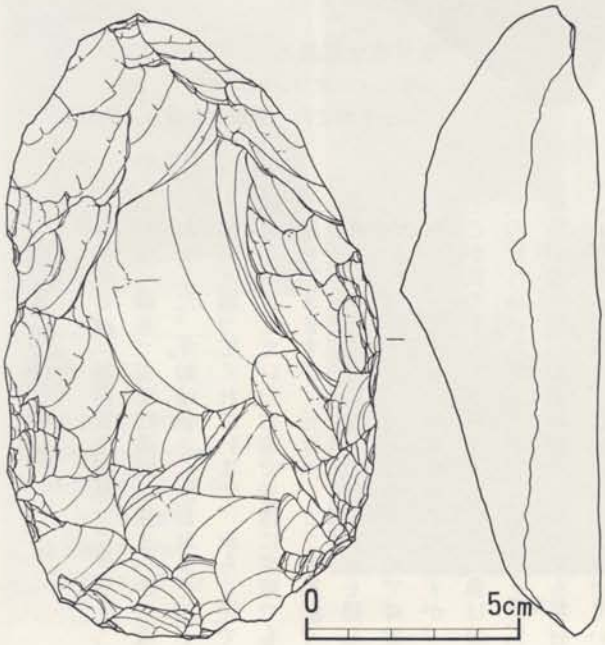
八王子市堀之内にあります№72遺跡は、多摩川の支流である大栗川と寺沢川の合流点付近の段丘上に位置する縄文時代中期の大規模な集落遺跡です。昨年度の調査では、縄文時代よりも古い旧石器時代の石斧を含む石器群を発見しました。その石斧は二万年前よりも古い年代のものであるという点で重要なものですが、同時に石器群も大変珍しい性格であることが整理作業を進めるうえで少しずつわかってきました。今回はその石斧を含んだ石器群について紹介することにしましょう。

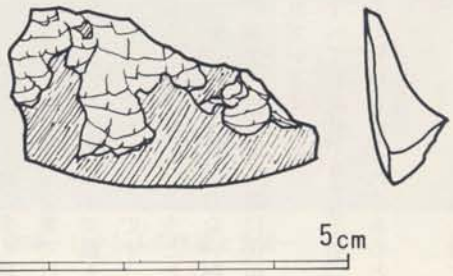
多摩ニュータウン地域で最も古い遺跡は稲城市の№471－B遺跡で、今から約五万年前の旧石器時代の遺跡です。土器が発明される以前の旧石器時代の遺跡は多摩ニュータウン地域で今のところ100遺跡以上発見されていますが、二万年前よりも古い遺跡はわずかに4遺跡程度で、そのうち№471－B遺跡を除く3遺跡は、二万年前から三万年前に属するものです。またこれら遺跡からの出土遺物も点数は少なく、隣接地域である武蔵野台地の二万年から三万年前の遺跡とは大きく様相を異にしています。

今回、二万年前以上にさかのぼる石器類が発見されたのはこの遺跡の西端に近い段丘の落ちぎわにあたる部分です。合計で1,100点に近い石器類が出土していますが、その大部分は径4m程度の狭い範囲に集中するように分布しています。石器には打製の石斧や、その製作途中のものが含まれていますが、大部分がそれらの石斧を大きな石から作った時にできる「くず」である剥片類です。また、原石から石斧の素材となる塊を取りさった残り物にあたる大形の石核も存在し、それらが接合することから、その場が石斧を製作した場所であったことがわかってきました。また遺物の中には、局部磨製石斧の刃部を再生した時にできる剥片が含まれていることから、局部磨製石斧も作られ、使われていたことがわかります。

局部磨製石斧とは、石斧の刃部や器体の一部を研磨した石斧のことで、世界的には旧石器時代には例が少ないのですが、日本では二万年前から三万年前の石器群に特徴的に出土する石器です。隣接地域の武蔵野台地の二万年前から三万年前の石器群でもこの石器をみることができます。

多摩ニュータウン地域で今回初めてこの時期の局部磨製石斧が発見されたことは、いままで数が少なく様子がわからなかった多摩ニュータウンの二万年前から三万年前の石器群を、隣接地域の石器群と比較する上で大変重要です。また、原石から石斧を作っている製作場所は、今のところ他の地域にも例がないので、今後、整理作業を進めることによって製作工程の復元や場の利用法を考える上で、貴重なデータを与えてくれることでしょう。（鈴木美保）





多摩の遺跡展
発掘物語 *in TAMA*

多摩東京移管百周年記念事業の一環として「発掘物語 *in TAMA*」が立川ルミネ9階、ウィルホールにおいて開催されました。

8日間の開催で、6588名の見学者がありました。この短い期間で、人の集まりのさほどよくないフロアにしては、多くの方々の参加を得て関係職員一同、胸をなでおろしているところです。展示会場に所狭しと展示された縄文土器に感動する参加者が印象的でした。

「多摩のムラと生活」をテーマに展示構成を行い、「縄文時代中期のムラと生活」についての展示と共に「多摩の五万年」と題した通史的な展示を中心に展示を行いました。この他に縄文土器作りや、古代ろくろを再現し、それを用いた木皿の製作の実演なども盛り込むことができました。

会場にて

土器作りの実演見学

文化財講演会

10月3日（日）午後2時から國學院大學文学部教授永峯光一氏による講演「縄文の世界」が行われました。会場は国立駅南口のたましん国立支店4階ホールをお借りして開催しました。

日本文化の歴史を、いくつかの相が重なり合っているという考えに基づき、「もともとの日本固有の文化は何か」について講演されました。さらに、最新の調査結果を織り交ぜながら、縄文時代の生業などについてのお話しをいただきました。参加者125名。

3月12日（土）午後1時半から当センター調査研究員鈴木美保による講演「現生人類の起源はどこに?」が行われました。

遺伝研究の進展により脚光を浴びた「イブ仮説」は現生人類の起源問題にさまざまな波紋を巻き起こしました。この問題に関するモデルをいくつか紹介すると共に、そうした仮説がどのような研究から導き出されるかについて、フランス、シリアでの研究風景のスライドを交えながら、概説を行いました。

160名の参加者がありました。

講演する永峯光一先生

講演する鈴木調査研究員

菅原神社台地上遺跡 現地説明会

当センターが調査を行っています板橋区成増に所在する、菅原神社台地上遺跡の現地説明会が11月27日（土）に行われました。

主に、弥生時代後期の集落跡（竪穴住居跡約140軒）、古墳時代後期の古墳を実際に見学することが中心となりました。当日は寒いにもかかわらず、地元の板橋区民を中心に419名の参加者がありました。

多摩ニュータウン No.330遺跡現地説明会

町田市小山において調査を行っていますNo.330遺跡の現地説明会が、12月18日（土）に行われました。

古墳時代後期の集落跡（竪穴住居跡50軒）、横穴墓などの見学が中心となりました。小春日和の天候の中、遺跡が工事現場に囲まれているため京王相模原線多摩境駅からバスで送迎を行いましたが、参加者は192名でした。

平成六年度の展示

当センターの展示ホールを中心としたフロアでは、多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査成果を毎年テーマを変えて展示しています。

今年度は例年のような、歴史を通した展示の他に、主に奈良・平安時代、多摩を中心とした地域を支えた生産、とくに須恵器、瓦、鉄の生産、木器の生産についての展示も行いました。また、稲城市大丸窯跡群から出土した国分寺瓦を実際に持つことができるコーナーや、木工ろくろの復元も実際にみることができます。

なお、展示ホールの天井には、今回5万年にわたる人類の歴史についての年表を各時代、同一縮尺で半円形に製作してみました。

また、都心部における江戸遺跡および板橋区菅原神社台地上遺跡の出土品についての速報展示も行っています。ぜひ、ご覧ください。

新展示　多摩の遺跡と遺物ーむかし人（びと）の生活と生産ー

発　行
㈶東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1—14—2
☎ 0423-73-5296
平成6年3月31日